

大安寺釈迦像の周辺 (その1)

——日本仏教彫刻における「宗教造形」と「信仰造形」について (その2)——

田 中 恵*

(1995年6月30日受理)

序

七世紀前半を代表する止利様式の仏像が利益の象徴として信仰を集めた国産の仏像であったことを前稿で述べた(拙稿「止利仏師の周辺——日本仏教彫刻における「宗教造形」と「信仰造形」について(その1)——」『上原和博士古稀記念美術史論集』上原和博士古稀記念美術史論集刊行会1995所収)。その後の日本の仏像の展開を考えると、止利様式の仏像から離れてゆく展開が概ね七世紀半ば頃であったらしいことが、紀年像等から窺える。しかし、信仰との関係から考察するとき、中国を中心とする仏像の様式の展開に応じて(準じて)、日本の仏像様式も変化していったというような事実だけを述べるに留まるわけにはいかない。なぜなら、止利様式そのものにしても中国の様式を大きく外れている部分を持つからである。しかし、事実として、中国の様式が七世紀半ばからの日本の新しい仏像様式に深い影響を示していることもそれなりにある。この転換点について考えてみることにする。

この展開のなかで鍵を握る仏像が、大安寺釈迦像と、薬師寺薬師三尊像と考えられる。なかでも薬師寺像は今までも多くの先学の論議を賑わしてきた。しかし、焦点はその造像が藤原京のものであるか、平城京のものであるかに集まりすぎていた感もある。それらをもう一度整理・考察するためにも、平城京の二つの重要寺院の中心になる像への検討は、日本の仏像彫刻の止利様式からの飛躍(写実性の獲得)を考えるためにも必要と思われるのである。ここでは特に既に失われてしまった像ではあるが大安寺釈迦像を中心に考察することにする。それはこの像への熱狂的信仰が当時の文献に遺るからである。

(以下次稿)次にその造形表現がそれ以前の止利様式と大きく異なるであろうことについて考えたい。それは多く、経典の内容を造形で表現する(変相的)ということによっているようである。この造形表現の日本への導入は、唐よりの直接的な造形の輸入に基づいているようにも見える。止利が大陸様式(朝鮮半島の要素も多い)に基づきながらも、それとは一線を画する造形で、「日本的仏像」の第一段階を示しているとすれば、文化的に大きな差のあった唐よりの直接的な宗教造形の導入は、その利益が確認されたとき、新しい流れとなつて、日本の仏像表現は新しい段階を迎えたものと思われる。これらの点を考慮すれば、博仏や押出仏は図様が容易に持ち運べる点や、複製可能である点など、重要な存在である。

これらの点を踏まえると、現一般的に理解されている「仏像の造形様式展開」は、その裏に、いくつかの仏像が特定の利益を示したことと深く結びついて信仰されたことと無関係では

* 岩手大学教育学部

ないと思われる。日本の仏像を中国の様式展開と並行して考察する時においても、日本における中国様式の導入の端緒を示す類の問題は深く留意されねばならないと考えられるのである。

第一章 大安寺と丈六釈迦像

1) 寺史の検討

大安寺と薬師寺は共に、平城京の中央左右(大安寺～左京六条四坊、薬師寺～右京六条二坊)の重要な位置を占める寺である。藤原京でも大官大寺・薬師寺が同様の位置を占める重要な寺であった。そして、平城遷都に際して、共に移された、と記録には記される。まず、大安寺(大官大寺)の寺史の概略を太田博太郎氏の『南都七大寺の歴史と年表』¹⁾等によって、述べておくことにする。

①大安寺とその前身について

『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』(以下『大安寺資財帳』という)の縁起部によれば、大安寺は、その源を、聖徳太子の熊凝精舎に遡るといふ。しかし、造営の実質は『日本書紀』(以下『書紀』という)舒明十一年639百濟大寺の造営まで下がると考えられる。『書紀』は次の皇極天皇も元年642に「朕、大寺を起し造らむと思欲ふ。」(『書紀』の読み下しは岩波古典文学大系本による)と述べ、一連の事業を継続されたことが記される。ついで、孝徳天皇は白雉元年650～二年に丈六繡仏を施入している(『大安寺資財帳』では、讓位後の皇極(斉明)天皇の発願としている。)さらに、天智天皇が乾漆造の丈六仏像二具を含む仏像九具十七体と四天王像を造立している(『大安寺資財帳』～なお註2参照)。

その後、壬申の乱に勝利した天武天皇は寺地を高市に移している(天武二年673・高市大寺～『大安寺資財帳』)。その後、寺名が大官大寺と改められている(天武六年677～『大安寺資財帳』)。この寺名の改称が寺地の変更を伴ったかどうかについてはいくつか問題があるが、藤原京(持統四年690宮地をみている)の条坊にあう寺地を持った大官大寺が発掘されているから(藤原京の条坊決定は天武二年には遡り得ない)、藤原京の大官大寺は高市大寺とは場所が異なる可能性は高い。その藤原京の大官大寺であるが、近年の発掘の結果からすれば、伽藍の中心線は藤原京の条坊とほぼ合い、藤原京の条坊の決定と併せて寺地が決定されたこと、また、その造営が、いわゆる伽藍配置の法則にやや背く不規則なものであったことも指摘しておかねばならないであろう(もし、中門正面の建物を太田氏の指摘のように「金堂」とすれば、これを『大安寺資財帳』の縁起部に出る、文武天皇の「九重塔、金堂及び丈六像の造営」と関わって考えるのが妥当であろう。)

次に、問題になるのは、大官大寺の平城京移転に関わる尊像移転の問題である。『続日本紀』(以下『続紀』)では靈龜二年716五月十六日条に「始めて元興寺(大安寺)を左京六条四坊に徒し建つ」(「元興寺」が「大安寺」の誤りであることは坊条の位置が大安寺のものであることから明らかである。～なお註3参照)とある。平城京が和銅三年710に遷都されて六年後である。この時点は、その寺院の造立着手か、金堂完成と考えられるようである。(『大安寺資財帳』では養老六年722に「平城宮御宇天皇」が「仏供養具・聖僧供養具」等を施入しているから、金堂の完成はこの辺りまでとも考えられる)

この間に、藤原京の大官大寺に重要なことが起こっている。『扶桑略記』には遷都の翌年、和

銅四年に藤原京と大官大寺が焼亡している記事がある。又発掘の結果からも大官大寺の伽藍は建築中に焼失したと思われる回廊などが認められ、その後の再建の様子も認められないことから、『扶桑略記』の和銅四年の焼亡の記事を事実と認めることもできそうな状況である（後述）。

ここで問題になるのは、天武天皇から持統天皇、文武天皇の間で造営が続けられた、大官大寺の様子についての理解である。『統紀』には文武天皇の代となって、大宝元年701七月二十七日には大安・薬師二寺を造る司を寮に、造塔・造丈六の二官を司に準じ、翌年八月四日には高橋朝臣笠間を造大安寺司とするという記事が見える。『大安寺資財帳』にも、文武天皇が九重塔・金堂を建て、丈六像（意味からして本尊像であろう）を造像したと記されている。

もし、『扶桑略記』の記述を「藤原京大官大寺の焼亡＝文武天皇の造像の丈六本尊像の焼亡」と考えるならば、当然のことながら、霊亀二年の平城京への大安寺の移転？に際しては、本尊像は藤原京の大官大寺以外の何処からかもたらされたと考えるほうが妥当で、この点も問題になろう（後述～『大安寺縁起』（醍醐寺本諸寺縁起集による）は和銅三年のこととして、「伽藍及丈六仏像等」を平城に移すとあるが以上の状況を考えると信はおききたい）。

その後の大安寺は道慈（養老二年718帰朝）の金堂の新しい構成によって、金堂においては本尊を天智天皇発願の丈六釈迦像としながら、周辺に新しい像を加えて霊山浄土変（完成は天平十四年742）とし、また、中門・回廊にも唐風の羅漢画像等を加えて、道慈が唐で学びとってきた新しい様式の寺院として『大安寺資財帳』が完成した天平十九年747には概ね完成したものと理解されるのである（塔などはまだ完成していなかったと思われる）。

②「大寺」本尊は移動したか

従来は（平安時代の『大安寺縁起』のように、「常識的」に考えられてきたのかもしれないが）、大官大寺から大安寺の間で、伽藍と共に本尊像が移動したと考えられてきた。『大安寺資財帳』によって推測すれば、大安寺の金堂安置仏のうち本尊の丈六釈迦像及び四天王像等は天智天皇の発願の像であり、周辺像（『大安寺資財帳』によれば「即空色菩薩二軀，即羅漢像十軀，即八部像一具」）は寺家（道慈）企画の像に受け取れるのである。しかし、この本尊像を太田氏（また『大安寺縁起』）のように、藤原京の大官大寺からの移転の尊像とすることに対しては次のような疑問がある。すなわち、藤原京の大官大寺に、後の大安寺の本尊像（天智発願）が存在して、文武発願の丈六像は焼亡したにもかかわらず、天智発願像は焼亡しなかったのに後に本尊像となったと考えるのは、同様天智天皇の発願になる四天王像が大安寺に存在することなどから、文武発願像だけが救い出されなかったという矛盾を生み、無理があると思われるのである。

そこで、大安寺の前身とされる「大寺」とその本尊像について記録を見ておくことにする。前項にも述べたが、大安寺の前身は、「熊凝精舎」「百濟大寺」「高市大寺」「大官大寺」と続くものとされる。まず、「百濟大寺」に関する事情を年表風に記しておく。

舒明十一年 639	(大宮と) 大寺を造る (十二月九重塔を建てる) = 『書紀』
舒明十二年 640	組大灌頂幡 施入 = 『大安寺資財帳』
舒明十三年 641	(舒明没までに) 九重塔・金堂石鴟尾焼く = 『大安寺資財帳』
皇極元年 642	朕、大寺を起し造らむと思欲ふ = 『書紀』
大化元年 645 (孝徳)	仏教興隆の詔にかかわって、「恵妙を寺主」にする = 『書紀』 同様、(これ以前に)「阿倍倉橋麻呂、穂積百足」を寺司にする = 『大安寺資財帳』

白雉元年 (孝徳)	650	丈六繡仏(『書紀』にこの時発願があり翌年完成の記事あり、『大安寺資財帳』に天平十九年には大安寺にあったことが知られる)
天智七年	668	丈六釈迦仏像等を造る=『扶桑略記』。(『大安寺資財帳』に天智天皇の発願になる仏像九具十七体と四天王像があることを記す)

ここで知られることは、まず、舒明が発願した「大寺(百済大寺)」であるが、舒明没までに、金堂があったらしいことが記されるから、ここに本尊像が祀られていたと考えてよいだろう(やや年月が不足しているようにはみえるが)。次に、舒明皇后の皇極の時代には、再び大寺を造る記事がある。『書紀』割註に「百済大寺」の語もあるから、これが百済大寺を指すことはまず間違いないであろう。ちなみに、「大寺」とは「国家大寺」の略語と思われ、一般的には「官寺」を指す言葉⁴⁾であるが、ここではやや意味が異なり、「天皇家の持仏堂」的意味を持っていると考えられる⁵⁾。これは舒明の「大寺」の造営継続と考えられよう。百済大寺(金堂?)の完成は、寺主が任命された大化元年が下限であろう。それ故、百済大寺は舒明～皇極(斉明)の寺と考えてもよいであろうし、ここまで当然本尊像も完成されていたものと思われる。

次に、白雉元年の丈六繡仏と天智発願の仏像(『大安寺資財帳』は九具十七体を天智発願の像とし、『扶桑略記』『大安寺縁起』は「造丈六釈迦仏像并脇士菩薩等像」を天智発願の像とする)のついてであるが、前者丈六の繡仏については、『大安寺資財帳』に皇極(斉明)天皇の発願に記されているから、一連の事業の中での、造像と考えることもできる(後の経緯からすると、百済大寺に安置されていたと考えるのが最も一般的で、あるいは講堂のような施設の完成を意味するのであろう)。

しかし、後者天智発願の仏像は位置付けがなかなか困難である。これを天智七年五月のこととする『扶桑略記』は既に、大安寺にある仏像の様子を基に記された可能性のある文で、「勅造百済大寺。今大安寺也。別造丈六釈迦仏像并脇士菩薩等像。安置寺中。」と百済大寺を再び造ったように記すが、同文中には「靈山実相」の語もあって、道慈が大安寺金堂の仏像配置を靈山浄土変に作り替えてからの印象も受けるからである。とすれば、この文だけから既に完成していた百済大寺の造像として天智発願像を考えることは難しく⁶⁾、後に大安寺の像となった釈迦像が天智発願像であったことのみを意味するといってもよいであろう。この点は大安寺本尊像の伝来にとっても大きな問題となる。

次に、その後の「大寺」、高市大寺以降の様子を見ておこう。天武天皇の「大寺」である「高市大寺」は、壬申の乱後間もない天武二年673から宮の付近で造営が始まるが、その完成は天武六年677の「大官大寺」への改称以前と考えられる。しかも、さらに、藤原京の遷都(持統八年694)に伴っての大官大寺は寺地の移転もあった様で、藤原京の薬師寺の寺地決定時期(後述)からすれば、藤原京の大官大寺の造営は、天武末年以降文武天皇に至る間と考えるのが自然である。特に、文武天皇は造大官大寺官を寮に準じさせ(同時に造薬師寺官も寮に、造塔・造丈六官を司に準じている=『統紀』大宝元年701)、九重塔・金堂・丈六像を造った(『大安寺資財帳』)と記す。少なくとも、藤原京の大官大寺に関しては、持統・文武と二帝に関わって、寺の造営が行なわれ最終段階では文武天皇が造営の中心であったみるのが妥当であろう。

さてその本尊像であるが、これらについての記録はない。高市大寺以降の寺地は、

- (a)「天武二年から～持統半ば」の「高市大寺～(第一次)大官大寺」
- (b)「持統半ば～文武」の「藤原京の大官大寺」

の二つになるが、後者については『大安寺資財帳』縁起部にいう文武造頭の丈六像を本尊と考えることができよう。しかし、この像は『大安寺資財帳』の資財部には見えず、藤原京の大官大寺とともに焼亡した可能性が強い。

これらから、大安寺の前身といわれる各寺院の本尊像の由来を簡略に示せば、

1. 百濟大寺=舒明～皇極（斉明）発願像
2. 高市大寺～（第一次）大官大寺=不明
3. 藤原京の大官大寺=文武発願像
4. 大安寺=天智発願像

と単純に移動したといえない状況が知られるのである。これらからいえることは、「大寺」は、他の一般寺院と違って、天皇の居城の移転によって寺地を変更しつつ続いたとはいえ、別の寺としても考えられるほど独立性が高かったと見えるのであり、その際、本尊像も寺地の移動に伴って移動したとだけ考えるよりは、天皇が度々本尊たる丈六像を発願造頭した、という可能性も考慮したほうが良いと思われるのである。

しかし、聖武天皇の平城京において、「大寺」の文字は一時的にせよ消える（『大安寺縁起』によれば、後に南大寺と俗称されたという）。「大安寺」がその後継となったからである。また、本尊像も新しくは造営されず、天智天皇の発願の像を用いることとなった。この変化は、重要なことであると考えられる。また、その本尊像の周辺に道慈の手によって、脇侍等が配され、靈山浄土変になったことも、以前からの「大寺」の状況を一変させることになった。私は「大安寺」という新しい寺名にそれまでの「大寺」という概念を越える寺の意味を感じるのであるが、それは後に譲るとして、次にこれと関わる部分で藤原京の薬師寺の造営に関する概略を先に記すことにする。

③藤原京の大官大寺の造営～薬師寺にかかわって

薬師寺についてここで述べるのは、藤原京の大官大寺の造営に深く関わるからである。藤原京の薬師寺は、周知のように持統天皇の病を深く憂いた天武天皇の発願（天武十一年 682）によりできた寺院である。

その造営は、しかしながら、天武帝の存命中には完成せず、記録上の確認できるものでは、持統二年 688 の薬師寺で開かれた無遮大会である（『書紀』。なお、寺名が「薬師寺」であることからしても、本尊の薬師像無しで法会が開かれるとも思えず、藤原京薬師寺の薬師像がこの時まで概ね完成していたことも同時に判断できよう）。薬師寺の東塔擦銘では、「鋪金が終わらないうちに、天武が亡くなった」旨記されるが、全ての工事をこの短期間で終えるのは無理があると考えられるから、工事は帝の没時に先行して始められたとして良いであろう。なぜなら、持統六年 692 には講堂の阿弥陀繡仏が造頭・寄進されている（『薬師寺縁起』。繡仏の開眼を担当したのは道昭で、この賞として文武二年 698 大僧都に任じられている～『七大寺年表』～から遅くともこの時までには講堂も完成していたはずであり、金堂の完成をこの後におくことはできないと思われる）から、この時点では概ね金堂の工事は終了していたと考えられるのである。この薬師寺の寺地も概ね藤原京の条坊に乗り、又、藤原京計画時（薬師寺の造営過程からしても、たぶん天武末年頃）には先の大官大寺同様二大主要寺院として造営が計画されていたものと考えられる。とまれ、天武没年には藤原京の地では二寺院ともに完成していなかったと考えられる。天武の没後百カ日の法要（無遮大会）は、（薬師寺で無遮大会が行なわれる前

年の) 朱鳥元年十二月大官・飛鳥・川原・豊浦・坂田の五寺で行なわれているが、ここに見える大官大寺は旧寺地のそれであろう。

薬師寺の造営のその後をみると、道昭が大僧都に任じられた文武二年 698 には、『統紀』に薬師寺の構作がほぼ終わったので僧を住ませるとの記事があるものの、大宝元年 701 には造薬師寺司の官人の任命もあり、また、造薬師寺司を寮に準じるとの記事もある。このように考えると、薬師寺の造営が概ね終わり、僧を住ませた時点辺りが、藤原京で薬師寺が中心で造営されていた時期といえ、同時に計画され、藤原京の二大寺院の一を占めた大官大寺の藤原京での造営が、薬師寺にやや遅れるものになった可能性も、この薬師寺の工事の集中に原因が求められるかもしれない(別に高市の大官大寺は存在していたわけであるから)。とすれば、大官大寺の藤原京での実質造営は、まさに文武帝の時点に求められるのであり、文武帝が九重塔・金堂・丈六像を造ったという『大安寺資財帳』の記事は、この関連からまさに事実と考えられるのである。

なお、平城遷都の際、この薬師寺と大安寺(大官大寺)が藤原京におけるのとほぼ同じ位置を占めて移されている。これはこの二つの寺院が、当時の天皇家にとって最も重要な寺院であったことを示すが、薬師寺に関してはそれが天武～持統という壬申の乱以降の新しい体制の生みの親達に縁の深い寺院であることから理解できても、大安寺に関しては、本尊像が天智の造頭であることから他の要素が介入しているように思う。その辺りに注目しながら考察を続けたいと思う。

2) 平城京の大安寺釈迦像の周辺

①大安寺釈迦像に求められた利益

大安寺の当初の本尊丈六釈迦像は、『大安寺資財帳』に天智天皇の発願の尊像として記録される像の一つと考えられる像である。壬申の乱で覇を競った二人の兄弟、天智と天武の系譜は、その後も桓武に至る迄の間、天智系は天皇の座につくことが無かったほど、対立した関係であった(律令体制は天皇の皇位継承に関して、直系を志向していて、天智系・天武系の対立の原因が、そこにあるとすれば、この発願者の問題は重要である)。にもかかわらず、大安寺の中心となる尊像は天智発願の釈迦像であった。この意味についてまず考えてみる。

大安寺釈迦像に求められた「利益」とは実際何であったであろうか。これはそれほど考えられなかったテーマではなかったか。しかし、聖武という天武系の天皇の都平城京にもたらされた天智発願の尊像の意味は、平城京の造営とそれに伴う寺の移転に伴うものという現在までの常識的発想を、そのまま単純に肯定されるものではないと思う。ここには当時の信仰と仏教の両者の接点、特に「利益」という信仰的側面を抜きにしては考えにくいものには思える。なぜならば、それだけでなく『日本霊異記』の熱狂的といえるほどのこの尊像への崇拜が考えにくいからである。そこで、この尊像に対する熱狂の様子を『日本霊異記』(岩波古典文学大系本による)からその様子を抜き書きしておく。

- (a)上卷第三十二縁「三宝に帰信し、衆僧を欽仰し、誦経せ令めて、現報を得る縁」において、～(添上郡の災難に対して、村人が)流へ聞く、大安寺丈六、能く人の願に随ふときき、仍便ち人をして寺に詣で誦経せ使む。又請ひて曰はく「我等、官に参る向かはむに、寺の南の門を開きて親し

く拜することを得令めよ。更に請はくは、我等、闕二詣でむとする間に及びて、鐘の声を従は令めむと欲ふ」という（以下略）～

(b)中巻第二十八縁「極めて窮しき女、尺迦の丈六の仏に福分を願ひ、奇しき表を示して、現に大福を得る縁」において、～(大安寺の西に住まう貧しき女が)大安寺の丈六の仏、衆生の願ふ所を、急に能く施し賜ふと流へ聞き、花香油を買ひて、丈六の仏の前に参み行き、白し奉りて言はく「我、昔の世に福因を修せ不、現身に貧窮の報を受け取るが故に、我に宝を施し、窮しきの愁を免れ令めよ」といふ。(毎日それを繰り返すと、大安寺の大修多羅供の銭と注記のある銭四貫が門にあった。女は寺にその銭を返す。又翌朝、常修多羅供の銭と注記のある銭四貫が庭にあった。女は又寺にその銭を返す。その翌日も成実論宗分の銭と注記のある銭四貫が戸の所にあった。女は又寺にその銭を返した。三度とも、寺の蔵の封印は破れておらず、銭だけが四貫なかった。学頭の僧が女に問うと、女は、)「為す所無し。唯貧窮に依り、命を存ふるに便無く、帰すること無く、怙むこと無きが故に、我是の寺の尺迦の丈六の仏に、花香燈を献じ、福分を願ひつるのみ」といふ。(衆僧はそれを聞いて銭は仏の与えたものとして、女に与えた。)女、銭四貫を得、増上縁とし、大きに富み財に饒に、身を保ち命を存む。諒に知る、尺迦丈六の不思議の力、女人の至信の奇しき表の事を。～

この二例が大安寺の釈迦丈六像に関わる『日本霊異記』の記載であるが、ここには既にこの釈迦像が人の願いを聞き届ける抜群の力を持っていることが周知されていることが前提となつて描かれた説話であることが窺われる。特に(a)では、丈六の仏像を直接拝観することが大きな利益につながっているようにもみえること、(b)では、女性が丈六仏に献灯することが許されていたことも知られて、利益を施す存在は「釈迦」ではなく「大安寺丈六釈迦像」であることが端的に示唆されている点で興味深い。ではなぜこの尊像にこれほどの「利益」が期待されたのであろうか。この尊像には、それが期待されるほどの「実際」が既にあったと考えるのが適当であらう。それについて考えてみたい。

②天智天皇の丈六釈迦像の伝来

大安寺の釈迦像が、藤原京の大官大寺の本尊像を移したものと考えるににくいことは既に記したが、では像の伝来はいかに考えられるのであろうか。もう一度像の伝来と寺の性格を太田氏の著書⁷⁾からみておくことにする。太田氏にしてもこの像の由来を従来の本尊移動という形式と同時に考えるとなにか不思議さが伴うようで、

『大安寺資財帳』には年次を記さないが、天智天皇が乾漆造りの丈六仏像二具と四天王像を造立したとある(『扶桑略記』はこれを天智七年五月の項にかけている)。このうち四天王は仏殿に安置してあるというのであるから、同時に造られた丈六仏は『大安寺資財帳』の書かれた天平時代には大安寺本尊であったはずで、平城移転以前から本尊だったのであろう。そうすると、天智になって初めて本尊を造ったというのは、すこぶる不思議で、それまでの本尊が立派でなかったため、この時、新たに造ったのであろうか。

と述べている。『扶桑略記』は百濟大寺と大安寺を一連の寺とみて、後に大安寺の本尊像にな

る丈六釈迦像の造像について、百済大寺のこととして記しているが、太田氏によれば、百済大寺は舒明～皇極の造立の寺で、天智期まで本尊がなかったというのは不思議というわけである。また、大安寺で本尊というからには、それ以前の大官大寺でも本尊だったというのも、文武の丈六造像と抵触するから、「のであろう」というわけである。大安寺の前史に関わる不思議はこれに尽きるわけではない。太田氏の大官大寺の性格の記述をもう少し引用しておく。

大官大寺は「おおきつかさのおおてら」と訓じられている。「おおきつかさ」は天皇のことであるから、百済大寺～高市大寺～大官大寺は天皇家の持仏堂のような性格を持った天皇家の私寺で、宮とともに移ったのではないかと感じられる。(中略)少なくとも、百済宮の近くの百済大寺が、高市に移ったのは、天武天皇の宮に近いところに移したのではあるまいか。そして宮が天武天皇の飛鳥浄御原宮から藤原京へ移ったので、更に移ったのかもしれない。(この後に、平城遷都に応じて、大官大寺は真っ先に平城京に移されたのであろうと続いている～筆者註)

この「大寺」の性格、「天皇家の持仏堂のような性格を持った天皇家の私寺で、宮とともに移ったのではないか」という点を中心に考えてみると、まさに丈六仏像の制作された大津宮の天智天皇の時代が記録からすっぱりと抜けているのが知られる。これも注目される点である。この点を示しておく。

- | |
|--|
| <p>1. (百済川の畔にあり) 百済宮の付近 (舒明発願, 皇極造立) の百済大寺
◎大津宮 (天智六年 667～天智十一年 672) (内裏に仏殿あり)</p> <p>2. 飛鳥浄御原宮の付近 (天武) の高市大寺 (大官大寺に改名?)</p> <p>3. 藤原京内 (持統・文武) の大官大寺</p> <p>(4. 平城京内 (聖武中心) の大安寺)</p> |
|--|

この一連の「大寺」の性格が太田氏のように解されるならば、この点は重要である。なぜなら、天智天皇の時代と仏教の関わりについては、正史である『書紀』を見ても、天智天皇の大津宮には仏殿があったことが初出するし、その仏殿の南では後の天武天皇が出家を誓っているのが記されている。この大津宮の仏殿には注目する必要がある。

まず、大津宮仏殿の前で行なわれた、天武の出家については、『書紀』孝徳即位前紀に見える古人大兄皇子の出家の故事が参考になって行なわれている(記されている?)と考えられる。天皇位の継承を拒否するにあたって、古人大兄皇子は法興寺の仏殿と塔の間で「髻髪」を剃って、袈裟を着たという。いうまでもなく、法興寺の仏殿には当時の利益第一の仏像(飛鳥大仏)があり⁸⁾、それに誓っての出家ということができよう。憶測するに、大津宮の仏殿の仏像が飛鳥大仏に比肩できる像であればこそ、『書紀』に對置され、記録されているとも考えられるのである。

同時に、大津宮の仏殿の存在を「天皇家の持仏堂のような」とされる一連の「大寺」の歴史と結びつけて考えることもさほど困難なことではあるまい。これが認められれば、大津宮の仏殿の仏像も「大寺」の仏像と同格とみなすこともできそうなのである。

換言するなら、太田氏のいう「大寺」の意味を重視して考えるならば、『大安寺資財帳』にいう天智天皇の時の造像という乾漆丈六釈迦像は、『扶桑略記』にいう百済大寺の新造仏である可能性とともに、あるいは当初大津宮の仏殿に祀られていた像である可能性も無視できないので

あり、いかなる経緯で平城京大安寺にもたらされたかは別として、十分論議の対象になる像となると思うのである⁹⁾。

なお、大津宮の仏殿には仏像が祀られていたことすら記録には出ない。しかし、当時の仏殿の通常の中心的存在は彫像と思われる。それが丈六像であったことも、何にも触れられていないが、『統紀』に文武天皇の時の造大安寺司の記録と共に出る「造丈六司」は官营造仏工房の制作する仏像＝天皇発願の仏像のサイズが通常「丈六」であったことを示しているところである。ここに指摘した天智、天武、文武発願の一連の「大寺」の中心像にはすべてこのサイズが想定され、それを制作するような目的でこの司は設けられたのであろうと思われる。これは、その周辺（又は同等の位置付けにある）の薬師寺の造像などを考えるときにも重要な問題である。

③大安寺の本尊像の祀られ方

次に、天智天皇の造願の丈六像が大安寺に祀られて以後の経緯について考察しておくことにしたい。なぜなら、大安寺において、(前述のような「大寺」の各天皇の丈六像の造願の通例と異なると)本尊像は造願されることなく、天智天皇の造願した像が本尊像として用いられたからである。

平城京の大安寺では、本尊像を天智天皇発願の釈迦像（『大安寺資財帳』）とし、その周囲を靈山浄土変としている（この堂内の変化を指導したのは道慈であった。『統紀』の道慈伝では、道慈が勅により大安寺の伽藍造営を勾当したとあり、養老二年718に唐より帰朝した際に持ち帰った新知識で、造営に当たったものと思われる。天平十四年に寺家の造願で制作された靈山浄土変への本堂内の改造もこの道慈の計画であったであろう。）。しかし、この改変をもって、平城京の大安寺を聖武の造願とするわけにもいかない。なぜなら、本尊像周辺の造像は寺家の発願であり、天皇の発願ではないことが明らかであるからである。『大安寺資財帳』に見るかぎり、聖武天皇の造願の像は、わずかに、天平八年の「羅漢画像九十四軀。金剛力士形八軀。梵天帝釈波斯匿王毘婆沙羅王像。」のみである。この辺りに、大安寺が従前の「大寺」と少し異なる性格をもっていたことが見受けられ、本尊像の扱いもそれまでの「大寺」とは違ったものであったと考えさせるのである。前述のように、大安寺の釈迦像は九世紀初に記された『日本靈異記』に利益第一の像として喧伝される像である。『日本靈異記』によれば、この像に対する信仰の大きさから、扉を開いて、直接仏像を拝することを可能にしたとの記述もある。「(天皇家の持仏堂という)大寺」を受け継ぐ寺の状況として以前と違った要素が多すぎるように思われるのである。

この辺りを憶測すると、大安寺への天智発願の丈六像の移坐には、特殊な事情が介在すると思われる。前述の和銅四年の藤原京大官大寺の焼亡や、百濟大寺以来の「大寺」の連続を終焉させるような意図（寺名から「大寺」が消える）、その時の天皇の発願の仏像を本尊像としない事情、などが複雑に絡み合っているように思われるのである。

しかし、確実なところを記せば、大安寺は曲がりなりに「大官大寺」を継承する寺であり、その本尊像も過去の何れかの「大寺」の本尊像～もちろん天智天皇造願～が故あって移されたものと考えられることである。その理由の一は、「群を抜いた利益あらたかな仏像として既に名声を得ていたこと」であったはずである。その点を今度は「大安寺」という寺名そのものの中から探ることにしたい。

④「大安」とは何を示すか。

和銅三年710の平城京遷都に伴い、天皇の移動にほぼ即してきた「天皇家の持仏堂」的「大寺」は数度目の寺地の変更をした。しかし、平城京への寺地の変更に際しては、結果的に、堂宇の中心に安置される仏像は天智天皇造頭の像となり、その後に内容も大きく変化したのである。そして、遂にその後の遷都には寺は動くことがなかったのである。また、寺名からは「大寺」が消え、国家や天皇家の安泰を望むような新しい寺名「大安寺」が名付けられたことも注目される（『大安寺縁起』はこの寺名の変更を天平十七年745のこととしている）。

『続紀』によれば、藤原京の大官大寺の平城京への移転（大安寺）に関しては、先にも述べたように、平城京造営後すぐに移転があったとされており、その寺地も藤原京の位置を引き継いで、大官大寺・薬師寺のセットで天武系の天皇の都としてふさわしい存在として、位置付けられていたことが窺われる（これは計画として平城京の条坊のなかに認められるから、平城京の計画当初からあったと考えるべきであろう。また、後の天智系の桓武は、これらの寺を自分の都には移そうとはしなかった）。

ではなぜ、文武天皇造頭の藤原京の大官大寺の丈六像が大安寺に運ばれなかったのであろうか。一つには、和銅四年頃の大官大寺の焼亡が大きく関わっていると思う。和銅四年は平城遷都の一年後であるが、近年の大官大寺の発掘からは、藤原京の大官大寺が造営途中で焼亡したらしいことが確認されており、平城京の大安寺との併存関係が注目されるのである。鈴木嘉吉氏¹⁰⁾によれば、藤原京の大官大寺の発掘結果から、講堂（太田氏によれば金堂）・中門・回廊では、火事があったことが窺われ、中門・回廊においては、その時点で、外装まで出来上がらず、足場をかけていたことが判明したという。鈴木氏はこれを『扶桑略記』和銅四年711の大官大寺焼亡の記事の裏付けという。とすれば、平城京への移転後も藤原京の大官大寺は造営が（少なくとも火災までは）継続されていたとも受け取れ、移転の実際がどのようなものか疑問を投げけるのである。又、講堂から発掘された土器類からは、講堂は持統朝以後の造営とされる結果となり、鈴木氏自身が天智天皇造営の大官大寺はどうなったのであろうか、という疑問もでるほどである。

このように発掘の結果からもこの寺の歴史は、より疑問が深くなってゆくのであり、単純に、藤原京の大官大寺が平城京に移って、大安寺になったということで集約されていいものではないことが窺われるのである。

そこで問題になるのが、寺名の「大安」である。この言葉を、「薬師寺」の薬師同様、利益の目的を意味する言葉として把握してみたい。『大安寺資財帳』の縁起部には、斉明天皇が朝鮮半島へ出兵の際に九州で亡くなる直前のこととして、「百濟大寺」のことを天智天皇に託していることが見られる。これに続く、百濟滅亡に関わった日本の危機は、天智二年663の白村江の敗戦に続く、新羅～唐連合軍の日本侵略への脅威であり、九州から大和までの水城・山城の造営、そして、奈良盆地を離れての天智六年667天津宮の造営遷都となる。七世紀における、または蘇我氏からの政権奪取以来の、最大の危機を天皇家は迎えていたその時に、その頂点に立つ人物の発願で、後に大安寺の本尊像となる丈六釈迦像は造頭されたのである。「大安」とは天皇家の存続に関わって祈られ、（他には「日本」という国家の安泰等という）利益が期待され、それを成就した像に関する（寺の）名称として相応しいのではないだろうか。ここに、平城京の寺の名として、本尊への祈りの目的であった「天皇家～ここでは天武系の天皇の系譜～の大いなる安泰」がそのまま寺名となったものと理解できよう。それによって、結果的に、「天皇家の持

仏堂」のような「大寺」の性格が薄れ、律令国家を代表するような「官寺」としての大安寺へと生まれ変わったと考えられるのではないだろうか。なお、『大安寺縁起』は、寺名の意味を「天下太平万民安楽」というが、その裏に、以上のような経緯を推測することが可能に思う。

また、憶測を逞しくすれば、その本尊像は天武天皇とも浅からぬ因縁があったはずで、そうでなければ、この転換に顧みられることもなかったのではないか。例えば、天智が意味として「大寺」に関わる仏像として発願し、唐～新羅連合軍の侵略の恐怖に対して日本の存続を祈り、それに応えた仏像である他に、天武がそれに誓って出家し、政権を天智系から奪取するきっかけになった（前述のように、法興寺の飛鳥大仏同等の意味を持った）大津宮の仏殿の像など、天武とも縁のあった仏像のことが想起されるのである。

なお、天智天皇の仏像が制作されたと『扶桑略記』にある天智七年 668 は近江令の編纂の年ともいわれ（天智十年施行という）、唐の律令を本格的に取り入れようとした時期に当たっている。また、皇位についても直系が継承するべきものと改められ、全国的な戸籍が作られ（庚午年籍 670）、「日本と改称する旨唐高宗に通知した」と考えられている¹¹⁾。従来の朝鮮の影響を廃して、さまざまな面で、積極的に唐の文化を摂取しようとした日本の意図を感じるのである。天智天皇発願の「大安寺丈六釈迦像」の「新しさの意味・内容」もこの辺りを底辺にして考えるべきと思う（やはり天智天皇の周辺に位置する川原寺が唐風の彫像を変相風に配置したらしいことなど参考になろう）。同様、この平城遷都に伴う大安寺の本尊像の選択からすれば、同様に寺地を移した薬師寺においても、本尊像の選択が同じ理念で行なわれたと考えてよいであろう。すなわち、利益があらたかな尊像を移坐して、平城京の官寺の本尊とすることである。（移坐を考える場合）平城京の薬師寺の場合、藤原京の薬師寺以外の尊像を移坐したとは考えにくいから、この見地から見る限りにおいて、（新造ではなく）移坐という方が蓋然性が高いことになる。

⑤「大安寺丈六釈迦像の意味の変化」と変相表現

平城京の大安寺では金堂の様子が、天平元年頃 729 からの道慈の関与（『統紀』道慈伝等）によって、変化している。それは従来の金堂の仏像の在り方を大きく変えたとすら思われるのである。それは天智天皇が造願した丈六像そのものだけが利益を示すのではなく、経典の表現が金堂に求められ、「仏像そのもの」だけではなく、「経典＝仏教」によって利益がもたらされることへの転換を示すのであり、その変相的表現が大安寺の新しい金堂内の仏像表現として作られたことに、唐から帰国した道慈が大いに関わっていることを示しているのではないだろうか（ここに天武系＝聖武天皇の配慮があったのであろう）。

これも日本の仏像表現を信仰表現と仏教表現に分けながら考えていこうとする時には重要な点である。単に釈迦三尊像の周辺に肉色菩薩二軀、羅漢像十軀、八部衆八軀が加わって豪華さが増したというだけではない状況がある。『統紀』が大安寺を道慈の造営のようにいうほどの大変化と私も考えるのである。ある意味での彫像による変相表現の大寺院主要堂宇への取込の最初とも思われるからである。この手法は、旧来の仏像を生かしつつ、新しい表現を堂宇に取り込んだ点で折衷的ながら、信仰と宗教を結びつける上で大いに効能を発揮したものと思われるのである。

これについて、『大安寺縁起』は、唐より帰った道慈が、大寺（ここでは国家大寺の意か）を造ろうとし、天皇の意にしたがって、唐の西明寺の様に造営したという。また、天平十七年 745

に寺名を大安寺に改めたという。先の寺名の意味についての考察をここに考えるならば、そのように変える意図が天皇家の持仏堂たる「大寺」からの脱却でもあったと考えられるのである。

先にも述べたように、大安寺の釈迦像は、利益第一の霊像として、八世紀の平城京において、大いに信仰を集めた像であるが、それがこのような祀られ方をした点も大いに考慮されねばならないと考えるのである¹²⁾。

⑥『大安寺資財帳』の記載から

最後に、大安寺の仏像について考えるとき最も基本になる『大安寺資財帳』の仏像の記載について振り返っておくことにする。すなわち天平十八年に大安寺にあった仏像の様子である。

「合仏像玖具 壺拾漆軀。丈六即像式具。

右淡海大津宮御宇 天皇奉造而請坐者。

金泥銅像一具。

右不知請坐時世。

宮殿像式具。一具千仏像。一具三重千仏像。

金泥雜仏像參具。

木葉形仏像一具。

金泥灌仏像一具。

金泥雜仏像參軀。

金泥太子像七軀。

金泥菩薩像五軀。

合繡仏像參張。一張高二丈二尺七寸広二丈二尺四寸。二張並高各二丈広一丈八尺。

一張像具脇侍菩薩八部等三十六像。

右袁智 天皇坐難波宮而。庚戌年冬十月始。辛亥年春三月造畢。即請者。

一張大般若四處十六會図像。

一張華嚴七處九會図像。

右以天平十四年歲次壬午。奉十代 天皇。前律師道慈法師。寺主僧教義等奉造者。

織絨仏像一張。

画仏像六張。

右不知時世。

繡菩薩像一張。

右以丙戌年七月。奉為淨御原宮御宇 天皇皇后并皇太子。奉造請坐者。

合菩薩像八張並画像。

即四天王像四軀。在仏殿。

右淡海大津宮御宇 天皇奉造而請坐者。

壩四天王像二具。在南中門。

右天平十四年歲次壬午寺奉造。

即穴色菩薩二軀。

即羅漢像十軀。

即八部像。並在仏殿。

右天平十四年歳次壬午寺奉造。

羅漢画像九十四軀。

金剛力士形八軀。

梵天帝釈波斯匿王毘婆沙羅王像。並在金堂院東西廡廊中門。

右平城宮御宇 天皇以天平八年歳次丙子坐者。」（以上 仏物？）

「聖僧一軀」（以上 法物？）（筆者註～下線は割註記）

ここに示されている、仏像の由来は天平に近い順で考えると、平城京の大安寺で造営された像がまず挙げられる。

「 一張大般若四処十六会図像。

一張華嚴七処九会図像。

右以天平十四年歳次壬午。奉十代 天皇。前律師道慈法師。寺主僧教義等奉造者。

繡菩薩像一張。

右以丙戌年七月。奉為淨御原宮御宇 天皇皇后并皇太子。奉造請坐者。

壩四天王像二具。在南中門。

右天平十四年歳次壬午寺奉造。

即穴色菩薩二軀。

即羅漢像十軀。

即八部像。並在仏殿。

右天平十四年歳次壬午寺奉造。

羅漢画像九十四軀。

金剛力士形八軀。

梵天帝釈波斯匿王毘婆沙羅王像。並在金堂院東西廡廊中門。

右平城宮御宇 天皇以天平八年歳次丙子坐者。」

以上が、平城京大安寺で新造されたことが確認できる仏像である。この内、

「 壩四天王像二具。在南中門。

右天平十四年歳次壬午寺奉造。

即穴色菩薩二軀。

即羅漢像十軀。

即八部像。並在仏殿。

右天平十四年歳次壬午寺奉造。」

は道慈の大安寺新造計画の一貫として、四天王は中門用に、即の二十体は仏殿（金堂）の釈迦・四天王像等の周囲を囲む像として、新たに造像されたものである。又、

「 羅漢画像九十四軀。

金剛力士形八軀。

梵天帝釈波斯匿王毘婆沙羅王像。並在金堂院東西廡廊中門。
右平城宮御宇 天皇以天平八年歲次丙子坐者。」

は聖武天皇の発願ではあるが、同じく道慈が唐より新しい図像を持ち帰った結果を大安寺に用いたものと考えられる（いずれも画像と思われる）。なお「聖僧一軀」は聖僧用の供養具が養老六年に施入されているから、これも平城京で新造されたものであろうか。但し発願者は不明である。

次に、仏像（彫像）の数について検討しておく。

最初に記される、仏像の具の数は九、体数で十七という。それをいかに考えるかであるが、まずその後の繡仏項の前までの、資財帳に記される仏像の具の数を加えると、「丈六即像の二具、銅像の一具、宮殿像の二具、雑仏像の三具、木葉形仏像の一具、灌仏像の一具」の十具となって数が合わない。それ故「合仏像玖具壹拾漆軀。丈六即像貳具。／右淡海大津宮御宇 天皇奉造而請坐者。」の九具十七体は天智天皇に係る造像の体数（乾漆の丈六像二具を含む九具十七体の仏像が天智天皇によって造頭されたという意味）とするのが妥当であろう。こう考えると、これだけの数の仏像を何処からか運んできたわけであり、その元になる寺院は天智天皇の造頭になる寺院から展開した由緒ある寺院と考えられ、先に本尊不明とした高市大寺（第一次大官大寺）あたりが有力ということになろうか。また、記載の順序についても、頭に記される「丈六即像」（その内一具か）が、本尊像であろうことは推測できても、他の像がいかなる状況で大安寺に安置されていたかについては、不明の部分の方が多い。この他の仏像についても、判るものだけを次に挙げておけば、丈六の即像（釈迦像がその一体）の外は、「（それに付随していたと思われる）即四天王像四軀。在仏殿。（右淡海大津宮御宇 天皇奉造而請坐者。）」（繡仏で、『書紀』にも記載のある、皇極＝斉明天皇の発願になる）一張像具脇侍菩薩八部等三十六像（『書紀』では四十六像）」（安置場所は不明）が挙げられる程度で、多くの像は由来不明とせざるをえない。なお、『大安寺資財帳』の縁起部に記される文武天皇の発願の丈六像はここに記されていないことも注目すべきである。これらの状況は、藤原京の大官大寺の仏像のほとんどが移されていないということを示唆するようにもいえ、大安寺の前身として縁起部に記す、百済大寺、高市大寺、大官大寺、大安寺を転々とした仏像が少なかったことも示す。また、先の繡仏が示すことは、あるいは、この繡仏は百済大寺から直接大安寺に移動した可能性も否定できないのであり、大安寺の前身の寺が、それぞれ平城京の大安寺の設立時に存在した可能性も否定できないのである。（以下次稿）

註記

- 1) 太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店 1979。
- 2) 『大安寺資財帳』の記載では「合仏像玖具 壹拾漆軀。丈六即像貳具。／右淡海大津宮御宇 天皇奉造而請坐者」とある。太田氏は毛利久氏（「大安寺安置仏像の復元」『日本史研究』三号）の検討などを参照して、大安寺金堂には釈迦三尊像と四天王像（以上、天智天皇造頭）その他平城移転後造像の諸像が祀られていたとするが、「淡海大津宮御宇 天皇～天智天皇」の発願の像が平城大安寺に九具十七体（そのうち二具は乾漆（即）の丈六像）が祀られていたと読むべきであろう。なお、『扶桑略記』は、天智七年 668 に天智天皇が百済大寺に「丈六釈迦仏像并脇士菩

薩像等」を別に造り、寺に安置したと記す。なお、詳細は本文2)⑥『『大安寺資財帳』の検討』項参照。

- 3) 福山敏雄「大安寺及び元興寺の平城京への移建の年代」『史蹟名勝天然記念物』一一ノ三 1936 参照。
- 4) 岩波古典文学大系本『日本書紀』下 P233 註19。
- 5) 太田氏前掲書。
- 6) 『扶桑略記』の記述は大安寺が百濟大寺の後を承けている「伝承」に引きずられたのであろうか、また、『大安寺縁起』は齊明天皇の付託を受けて、百濟大寺の造営に天智天皇があたり、「丈六釈迦并脇侍菩薩等像」を寺中に安置したというが、既に百濟大寺の講堂が齊明天皇の時点で完成していたと考えれば、矛盾することになることは明らかである。
- 7) 太田氏前掲書。
- 8) 『書紀』天智十年十月条に飛鳥大仏に珍宝を奉納しているのが見えるから、その時点でもまだ「利益」の期待できる仏像であることが考えられる。これが大寺になっている大きな理由であろう。
- 9) 大津京仏殿の仏像についてもう少し考察しておく。『書紀』から大津京内裏の仏殿関係の記事を抜き書きしておくと、

(a) (天智十年十月八日) 内裏にして、百仏の目を開けたてまつる。(b) (同年十月十七日) <天武天皇は、天智天皇からその後を託されたのを辞して、それは皇后と大友皇子が適当とし>「臣は請願ふ、天皇の奉為に、出家して修道せむ」とまうしたまふ。天皇<天智>許す。東宮<天武>起ちて再拜す。便ち、内裏の仏殿の南に向てまして、胡床に踞坐げて、鬢髪を剃除りたまひて、沙門と為りたまふ。是に、天皇、次田生磐を遣して、袈裟を送らしめたまふ。(十九日) 東宮、天皇に見えて、吉野に之りて、修行仏道せむと請したまふ。天皇許す。東宮即ち吉野に入りたまふ。(c) (同年十一月二十三日) 大友皇子、内裏の西殿の織の仏像の前に在します。<ここで五人の重臣が大友皇子に忠誠を誓う>

の三つの記事がある。「岩波古典大系本『日本書紀』」の註記は(a)(c)の記事の繡仏を同一のものとする。これにはほぼ異議がないが、「内裏西殿」と「(b)天武天皇が出家した内裏の仏殿」とを同一に考えるかどうかは、他に資料がない。

しかし、天智天皇が大津宮に遷都した後いつまでも「大寺にあたるもの」が大津宮付近になかったとは考えにくい。なぜならば、宮付近には天智天皇が発願した崇福寺も存在しているほどであるからで～『扶桑略記』天智七年～、「大寺にあたるもの」がこれに遅れるとは考えにくい(天智は九州で没した齊明天皇のために、観世音寺を発願しているほどである。また崇福寺が「大寺にあたるもの」である可能性もある)。すなわち、記録にあらわれない「大津大寺」が存在したか、もしくは、この仏殿を新しい様式の「大寺」とみなすこともできよう。ただ、『大安寺資財帳』は「(天武二年十二月) 造寺司小紫冠御野王。小錦下紀臣訶多麻呂。二人任賜。自百濟地移高市地。」と述べ、「大寺」は「百濟の地から高市の地へ」移ったと記すから、「大津大寺」は考えにくい。それ故、大津宮の仏殿は重要さをより増すのである。

なお、このように理解するとき、大津宮に存在した新旧二つの仏像(一つは「大寺」を代表する旧仏、今一つは内裏西殿に懸けられていた新仏)の利益の差は『書紀』のなかに明示され、(a)(c)の繡仏の利益のはかなさと(b)の旧仏の利益のあらたかさが誇示されていると見ることもできる。これは天武自身が縁のある利益あらたかな像として、高市大寺の造営の際に大津宮の仏像が

高市大寺に運ばれた可能性も考えさせる。

- 10) 鈴木嘉吉「大和古寺の発掘」『大和古寺大観』第三卷付録 岩波書店 1977。
- 11) 林屋辰三郎「近江大津の仏教文化」『仏教文化の聖地・大津』大津市歴史博物館 1990。
- 12) 後に東大寺大仏が第一の霊像となったときまで、この状況は続いたものと推測される。また大仏完成後もその位置は依然として高かったものと推測される～十二世紀の大江親通の「七大寺巡礼私記」において、大安寺の釈迦像と薬師寺の薬師像が南都の極めて優れた仏像として、位置付けられる（「大安寺尺迦を除くの外、この寺～薬師寺～の仏像及び粧嚴諸寺に勝る」）のは、この影響を無しとしないのではないであろう。すなわち、大仏を除いて、平城京の左右に配置された代表的な官寺が、それなりの由緒を持って、又、蘇我氏の仏教から隔絶し、現在に続く天皇家を守り続けた存在であったことも、評価に含まれているかもしれない。この辺り近代の学としての美術考察とおおいに異なる視点が含まれているのである。